

資料

新聞などの報道に見る被災地の復興と野球の関連

高尾堅司^{*1}

要約

本稿は、新聞等報道で示された野球が被災地において果たす役割について報告する。1959年に伊勢湾台風に見舞われた名古屋市を本拠地とするプロ野球チーム(中日ドラゴンズ)は、主催ゲームの利益の一部を義援金として寄附した。1995年に阪神・淡路大震災に見舞われた神戸市を本拠地としていたオリックス・ブルーウェーブは、イベント等で被災者と触れ合うとともに、リーグ制覇という形で市民を励ました。同球団の優勝は、新聞等の報道で神戸市の復興と関連づけて報じられた。また、同年に高校野球が実施されたことに対しても、被災地の復興を象徴するものとして新聞に取り上げられた。2004年、福井豪雨に見舞われた福井市においては、被災地の高校野球部の全国大会出場と、甚大な被害を受けた地区のリトルリーグの活躍が、被災地を勇気づけるものとして新聞にとりあげられた。以上の事例は、被災地における野球チームの活躍は被災地の復興の象徴であり、被災者を勇気づけるものとして取り上げられることを示している。

緒言

日本は、古くから自然災害による被害が多く、近年になってもそれはとどまるところを知らない。1959年の伊勢湾台風、1995年の阪神・淡路大震災をはじめ、記憶の新しいところでは2004年7月の新潟・福島豪雨、その数ヵ月後に発生した中越地震など、甚大な被害をもたらされてきた。そして、大規模な被害に見舞われた被災地においては、被災者の心的外傷後ストレス障害が問題視されることが少なくない¹⁻²⁾。また、心的外傷後ストレス障害に至らない人々の中にも、何となく憂鬱で何もやる気がしないという被災者も少なくない。自然災害による心身症状の程度に差はあれ、被災者を励ますような対象があれば、たとえ一時的であれ被災者の気分を高揚させることができるだろう。

被災者を励ます対象のひとつに、被災者が身近で共有しやすいものが挙げられる。被災者にとって身近で共有しやすいものは、被災者との物理的距離が近く、被災者にとって馴染み深いという条件を満たしていることが多い。この条件を満たすものひとつに、被災者に似た境遇におかれていて、被災前から被災地内で活動している組織等が挙げられる。当該組織は、もともと地域とのつながりが深い組織に

限られる。被災地とのつながりが深い組織が社会的に望ましい活動のみせれば、新聞もしくは雑誌等の媒体において、「災害に負けず」もしくは「復興に向けて」という見出しとともに表現されることがある。

時には、当該組織の活動が被災地復興と直接的には無関係である場合でさえ、復興の象徴として表現されることすらある。被災地の野球チームの活躍は、そのひとつである。本稿は、新聞等報道にみられる被災地の復興と野球との関連づけについて報告することを目的とする。野球が復興と関連付けられて報じられることは、野球が復興を促すものとして意味づけられていることを示唆する。本来は、スポーツのひとつに過ぎない野球であるが、社会情勢の変動に伴ってスポーツとは別の意味づけがなされている。そこで、まずは社会情勢の変動との関連性をまず確認したうえで、被災地における野球チームの活躍がどのように報じられてきたかという点について資料を紹介しながら例証する。

社会情勢の変遷と野球に対する意味づけの変遷

1. 社会情勢の変遷と野球に対する意味づけの変遷

日本における野球の歴史は、明治6年に現在の東京大学の教師だったアメリカ人が学生に伝えたことに端を発する³⁾。それ以降、明治11年に新橋アスレ

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科
(連絡先) 高尾堅司 〒701-0193 岡山県倉敷市松島288
E-Mail: takao@mw.kawasaki-m.ac.jp

ックス倶楽部が編成されるなど、日本各地に野球が急速に広まった³⁾。野球は、明治期から日本に根付いているだけに、社会情勢と密接に関連し、時にスポーツ以外の意味づけがなされたことがあった。

第二次世界大戦中は、プロ野球(当時は職業野球と呼ばれた)の試合前に、選手による手榴弾投げが実施され、野球は国民の戦意昂揚に寄与する競技としての意味づけがなされた⁴⁻⁶⁾。ところが、戦後においては全国高校野球選手権大会(夏の甲子園)の会期中に迎える終戦記念日(8月15日)には黙禱が行われるなど、野球が平和の象徴としてみなされている⁷⁾。スポーツ活動は、社会に対して正当化された文化的なものであるならば⁸⁾、野球に対する意味づけが社会情勢に左右されることは不思議ではなからう。

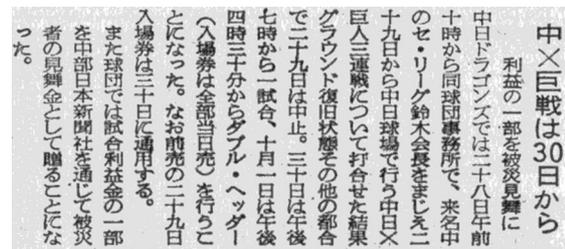
ただし、戦前のプロ野球で実施された手榴弾投げあるいは高校野球の黙禱にせよ、野球場で実施される特定の行為そのものが、人々の野球に対する意味づけを構成するだけではない。むしろ、野球と社会情勢とを関連づけて記された新聞等の報道に人々が触れることで、野球は戦意昂揚に寄与するもの、もしくは平和の象徴であるという意味づけを構成する側面がある。新聞等の報道は、事件を広く社会に知らしめる機能だけではなく、人々が社会情勢と物事を関連づけて想起させやすくする機能も担っているためである。たとえば、被災地の復興と被災地内の野球チームの活躍が紙面に並べられると、読者は野球チームの活躍が復興を意味するものとして想起しやすくなる。以下、被災地に本社もしくは支部をおく新聞社および出版社が「復興と野球」について報じた例を紹介する。

2. 自然災害と野球

2.1. 伊勢湾台風の記事

1959(昭和34)年の伊勢湾台風は、死者4,697人、行方不明者401人、負傷者38,921人、家屋の全壊が40,838棟など、中日ドラゴンズが本拠地とする名古屋周辺の東海地方に大規模な被害をもたらした。中日ドラゴンズの本拠地だった中日球場は、スコアボードが鉄骨のみを残して全壊したほか、看板の一部が吹き飛ばされ、球場前の警備員の詰め所が倒壊するなど、被害総額は約500万円にのぼった⁹⁾。9月29日に中日ドラゴンズ対読売ジャイアンツ戦が組まれていたが、グラウンドの復旧作業のため試合が順延となった¹⁰⁾。中日ドラゴンズは、順延試合で得た利益の一部について、中部日本新聞社を通じて被災者の見舞金として贈呈した¹⁰⁻¹¹⁾。また、広島カーブは同年10月10日から11日の広島カーブ対中日ドラゴンズ戦を「被災者救援シリーズ」と銘打って、利益の一部を被災者に送ることを決定した¹²⁾。10月

12日に実施された中日ドラゴンズの主催試合である中日ドラゴンズ対広島カーブ戦の利益の一部については、中日ドラゴンズが愛知県に贈呈した¹²⁾。この当時の記事の多くは、被災地を本拠地とするプロ野球チームが被災者に対する支援を行った事実関係で占められていた。



資料1 伊勢湾台風の影響による試合変更および見舞金拠出に関する記事

2.2. 阪神・淡路大震災の場合

(1) 高校野球の実施 伊勢湾台風による死者を上回る大惨事は、1995(平成7)年1月17日に発生した。淡路島を震源とするマグニチュード7.3の地震が、死者6,434人、負傷者43,792人、全壊及び半壊棟数は249,180棟にも及び未曾有の被害をもたらした。被害の大きかった神戸市、明石市、西宮市では都市機能が麻痺した。野球関連施設も大きな被害を受け、西宮市に立地する甲子園球場とその周辺も被害を受けた。これに伴い、同年3月に実施予定だった「春のセンバツ」と呼ばれる選抜高校野球大会の開催が危ぶまれた。主要野球雑誌の誌上には、野球よりも復興に全力を尽くすべきだという意見が掲載され、被災地における野球の実施に否定的な意見が記されていた¹³⁾。各界で高校野球の実施に対する賛否が飛び交う中、日本高等学校野球連盟と毎日新聞社は情報を収集し、実施すべきかを協議した。国会でも選抜高校野球大会の開始に関する首相答弁があり、被災地での開催に前向きなやりとりがなされた¹⁴⁾。その結果、試合数等に若干変更を加えて開催されることになった。

選抜高校野球が実施された後、新聞紙上ではいかに表現されたのだろうか。被災者のひとりである一人の新聞記者は、「開催に疑問抱いたが球児に慰め

られた」という見出しで、選抜高校野球大会の実施で被災者は勇気付けられたと記している¹⁵⁾。また、「夏の甲子園」と呼ばれる全国高校野球選手権大会においても、野球が復興の象徴として位置づけられるようになった。阪神淡路大震災で校舎が壊れた神戸市内の野球部員全員が、「がんばるや神戸」というTシャツを着て練習に励んだ。その高校は、全国高校野球選手権大会の兵庫県予選で敗退したものの、同校の野球部員の写真は大きく掲載された¹⁶⁾。本記事に示されるように、被災地の復興と野球が結び付けられて記述されており、伊勢湾台風時よりも野球が復興の象徴として取り上げられるようになった。

(2)オリックス・ブルーウェーブの対応 神戸市内の高校に限らず、神戸市を本拠地としていたオリックス・ブルーウェーブも同様に大きな被害を受けた。球団職員17人の自宅が全壊および半壊したほか、主力選手のなかには自宅が半壊する大きな被害を受けた者もいた¹⁷⁾。この事態を受けて、オリックス球団は宮古島キャンプの自主参加を許可したほか、選手たちの繁華街への出入りを自粛するように求めた¹⁸⁾。公式戦を前にして、オリックス球団内部ではフランチャイズ(本拠地)を一年間のみ移転するべき」という意見が出された¹⁹⁾。同様の意見は、野球解説者の間でも噴出しており、西鉄ライオンズ(現在の西武ライオンズ)で活躍した豊田泰光氏は、紙面を通じて被災地で野球をやることについて否定的な見解を示した¹³⁾。被災地での野球の実施に対する各界の反応は賛否両論だったが、結果的にオリックス・ブルーウェーブのオーナーが、「こういう状況だからこそ、被災地に勇気を」と主張したことで、通常通り本拠地(グリーンスタジアム神戸)でシーズンを迎えることになった¹⁹⁾。

シーズン開始とともに快進撃を続けたオリックス・ブルーウェーブは、見事リーグ優勝を飾った。同球団の優勝はマスコミに大きく取り上げられ、復興の象徴としてみなされた。多くの新聞記事は、オリックス・ブルーウェーブの優勝を神戸復興の象徴的なものとして位置づけていた。地元紙のオリックス・ブルーウェーブに関する記事は、阪神・淡路大震災という試練を乗り越えて復興への希望をもたらしたという筋書きで構成されており、読者が優勝をどのように意味づけるべきかを容易にしていた²⁰⁾。翌年に、同球団が日本シリーズ制覇を果たした際も、新聞記事の多くは、読者に被災地復興をイメージさせるような内容で構成されていた。



資料2 選抜高校野球大会に対する被災記者のコメント



資料3 「がんばるや神戸」と記された練習着を身につけた高校野球部員



資料4 1995年のオリックス・ブルーウェーブの優勝を報じる記事



資料5 1996年のオリックス・ブルーウェーブの優勝に湧く市民の様子を伝える記事

3. 福井豪雨の場合

阪神淡路大震災以外にも、水害の被災地域においても野球チームの活躍と被災地復興とを関連づけた記事が認められている。2004(平成16)年に豪雨に見舞われた福井県では、市内を流れる足羽川(あすわがわ)の氾濫で市内が浸水し、さらに鯖江市においても豪雨による大規模な被害を受けた。阪神・淡路大震災の際に野球が復興の象徴として位置づけられたように、福井豪雨の事例においても地元新聞紙上に野球と復興を関連づけるような記事が載せられた。紙上には、「豪雨被災者に勇気と感動を 福井闘志高ぶる」という見出しで、全国高校野球選手権大会の開会式で行進する福井高校の様子が伝えられている²¹⁾。さらに、福井市内の夏季少年野球選手権の記事では、「水害めげず木田 頂点 地区民と喜びを」と記されている。福井豪雨で被災世帯が多かった木田地区の少年野球チームが優勝したことは、地域住民に喜びをもたらし得るものとして位置づけられた。



資料6 福井高校の入場行進を伝える記事



資料7 浸水世帯が多かった木田地区の少年野球チームの優勝を伝える記事

結 論

以上の複数の事例から、阪神・淡路大震災以後の記事において、読者が野球チームの活躍から被災地復興もしくは被災者への激励を想起しやすいように構成された新聞記事もしくは雑誌記事が少ないことが分かる。新聞等の記事において、野球チームの活躍と被災地復興を関連づけられたとしても、実際には被災地復興が急ピッチで進んだわけではない。見方を変えれば、このような記事は、読者が「野球チームは試練を乗り越えて被災地復興をもたらした」と意味づけることを容易にしていたという解釈も可能である²⁰⁾。当時のオリックス・ブルーウェーブの私設応援団長は、「オリックス・ブルーウェーブの優勝が被災者にもたらした部分は否定しないが、実際に復興につながったかといえば話は別」と述べた事実が報告されている²⁰⁾。野球場から離れると、被災者の一人という現実と直面し、不安な状況におかれてしまう。たとえ、被災地の野球チームが優勝したとしても、被災者の厳しい現実が変わらないのは事実であろう。

たとえこれが事実だとしても、被災地における野球チームの活躍の価値が薄れるわけではない。ユニフォームの袖に「がんばろう神戸」という文字をつけたオリックス・ブルーウェーブの選手たちが大活躍したことは、ただ単に「がんばろう神戸」と口先だけで言われるよりも、はるかに説得力があったに違いない。事実、オリックス・ブルーウェーブが優勝したことで、被災者が勇気づけられたという実証的データがある²⁰⁾。したがって、野球チームの優勝が被災地復興に直接的に結びつかないにせよ、被災地の人々の心的な支えとして機能した点は評価に値すると言えよう。

また、オリックス・ブルーウェーブは、被災地の

人々に対するファンサービスを精力的に実施したことも無視できない。オリックス・ブルーウェーブは、最も被害の大きかった神戸市長田区の小中学校5校1,200人の児童をグリーンスタジアム神戸に招待し、オリックス・ブルーウェーブの野球教室によるイベントと、選手と子どもたちによるドッジボール大会を実施した。ファンと選手のふれあい事業に加えて、当時のオリックス・ブルーウェーブの監督(仰木彬)が、内野指定席20席を確保し被災者に提供した¹⁹⁾。被災地内に限らず、神戸を全国に知らしめようと、開幕直前にも拘わらずユニフォームの袖に「がんばろう神戸」という文字を入れた。そして、選手たちは「がんばろう神戸」という文字のステッカーを、神戸市の中心街である三ノ宮の街頭に立ち市民に配布した¹⁹⁾。

以上の新聞等記事と事実を踏まえると、被災地における野球チームの活躍は、必ずしも新聞および雑誌等報道において構成された物語に過ぎないのではなく、実質的に被災地に貢献した点も忘れるべきではないと言える。先述のように、阪神・淡路大震災直後には、被災地での野球に否定的意見が寄せられたが、結果的には「被災地だからこそ野球を実施すべき」だったと考えられる。野球チームの被災地復興への支援を考慮すると、社会情勢が悪化しているときこそ、地域の野球は地域住民の求心力を強めることができると考えられる。近年において、スポーツの地域性が失われつつあるという指摘があるものの²²⁾、地域の野球が地域に活力をもたらす余地は残されていると考えられる。

文 献

- 1) Green BL, Lindy JD, Grace MC and Leonard AC: Chronic posttraumatic stress disorder and diagnostic comorbidity in a disaster sample. *Journal of Nervous and Mental Disease*, **180**(12), 760-766, 1992.
- 2) Asukai N and Miyake Y: PTSD as a function of traumatic events, pre-trauma vulnerability, and post-trauma stress. *Psychiatry and Clinical Neuroscience*, **52**(Suppl), S75-S81, 1998.
- 3) 国民新聞社運動部編著: 日本野球史。ミュージアム図書, 東京, (復刊本) 2000.
- 4) 池井優: 白球太平洋を渡る。中央公論社, 東京, 1976.
- 5) ベースボール・マガジン社編: 日本プロ野球60年史。ベースボール・マガジン社, 東京, 1994.
- 6) 日刊スポーツ出版社: さようなら後楽園球場。日刊スポーツ出版社, 東京, 1987.
- 7) 小椋博: 甲子園と「日本人」の再生産。江刺正吾・小椋博編 高校野球の社会学-甲子園を読む。世界思想社, 東京, 161-182, 1994.
- 8) 佐伯聡夫: スポーツの文化。菅原禮編著 スポーツ社会学講座1 スポーツ社会学の基礎理論。不昧堂出版, 東京, 67-98, 1984.
- 9) 中部日本新聞: 中日球場のスコアボードが吹飛ぶ。9月27日付夕刊, 1959.
- 10) 中部日本新聞: 中×巨戦は30日から—利益の一部を被災見舞いに。9月28日付夕刊, 1959.
- 11) 中部日本新聞: 台風15号災害義援試合。9月29日付朝刊, 1959.
- 12) 中部日本新聞: 広島球場で被災者支援シリーズ。10月4日付朝刊, 1959.
- 13) ベースボール・マガジン社: 週刊ベースボール 2月6日号, 5, 1995.
- 14) 牧野直隆: ベースボールの力。毎日新聞社, 東京, 2003.
- 15) 毎日新聞: 開催に疑問を抱いたが球児に慰められた。4月13日付朝刊, 1995.
- 16) 朝日新聞: 復興甲子園, 胸に刻む 被災地校「人の支え学ぶ」高校野球【大阪】。8月22日付朝刊, 1995.
- 17) 日刊スポーツ出版社: プロ野球 ai, 3月4月号, 日刊スポーツ出版社, 1995a.
- 18) 日刊スポーツ新聞社: プロ野球 ai, 11月12月号, 日刊スポーツ出版社, 1995b.
- 19) デイリースポーツ: '95 パ・リーグ優勝!オリックス・ブルーウェーブ。神戸新聞総合出版センター, 神戸, 1995.
- 20) 高橋豪仁: 新聞における阪神淡路大震災に関連づけられたオリックス・ブルーウェーブ優勝の物語とあるオリックス・ファンの個人的体験 スポーツ社会学研究, **8**, 60-72, 2000.
- 21) 福井新聞: 豪雨被災者に勇気と感動を 福井闘志高ぶる。8月8日付朝刊, 2004.
- 22) 杉本厚夫: スポーツ文化の変容 —多様化と画一化の文化秩序—。世界思想社, 東京, 1995.

(平成17年12月10日受理)

Using Newspaper and Magazine Articles to Show the Relationship between Baseball and Reconstruction in Areas Affected by Natural Disasters

Kenji TAKAO

(Accepted Dec. 10, 2005)

Key words : baseball, reconstruction, natural disaster

Abstract

The purpose of this study is to confirm the role of baseball in areas affected by natural disasters. Japan has suffered serious damage from floods and earthquakes, such as the Isewan typhoon, Hanshin-Awaji great earthquake, and Fukui flood. Nagoya City, home to the Chunichi Dragons, was hit by heavy rainfall in 1959. The Chunichi Dragons assisted affected people with money at that time. 36 years later, the Orix Blue Wave helped Kobe City recover emotionally from the Hanshin great earthquake. Although those who lived in Kobe City were damaged greatly by the earthquake, the players did their best for the city all season. Most residents of Kobe City whooped in delight and the Orix Blue Wave encouraged the people and helped them forget their terrible situation. Even now, some residents of Kobe City express their thanks to the Orix Blue Wave. In the case of the recent Fukui flood, a high school baseball club and the little league of the affected areas encouraged Fukui City. These cases suggest that affected people are willing to commit to regional baseball. Furthermore, baseball plays a role in encouraging those in affected areas.

Correspondence to : Kenji TAKAO

Department of Clinical Psychology, Faculty of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
E-Mail: takao@mw.kawasaki-m.ac.jp
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.15, No.2, 2006 621-626)